

子どもたちは毎日、午後になって学校から帰ってくると、いつも大男の庭に行って遊びました。そこは、やわらかい緑の草が生えた、広くてすてきな庭でした。草むらのあちこちには、星に似た美しい花が立っていました。その庭には十二本のももの木があり、春になるとうすもも色としんじゅ色のせんさいな花があふれるようにさき、秋にはゆたかな果実が実ります。鳥たちは木々の上でたいそうあまい歌声をひびかせるので、子どもたちは遊ぶのをやめて聞きいるのでした。「ここで遊ぶのはなんて楽しいんだろう」と、くちぐちに声をあげました。ある日、大男

が帰ってきました。かれはコーンウォールに住むおにの友人をほう問し、そこで7年間いっしょにすごしていました。7年がすぎ、話したいことは全部話したし、もう話題もなくなってきたので、自分のしろに帰ろうと思ったのでした。大男がもどると子どもたちが庭で遊んでいるのが見えました。「おまえたち、ここで何をしている」大男が大きなどら声でさげんだので、子どもたちはにげていきました。「わしの庭はわしの庭だ」と大男はいいました。「だれだってそんなことはわかる。この庭では、わしのほか、だれにも遊ばせんぞ」そう言うと、大男は子どもたち